

大

学



2025

05

No.

422

時

報

| 特集 |

大学生の読書の今を探る
—多様化するスタイルと変わらぬ価値—

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2025(令和7)年05月20日発行 [隔月刊]

武蔵野美術大学



資料名 万祝着(地方名 マイワイギ)
収蔵番号 M0001992
収集地 東京都港区
所蔵 武蔵野美術大学 美術館・図書館 民俗資料室

美術大学ならではの民具コレクション「万祝着」まいわいき

武蔵野美術大学 美術館・図書館は、美術資料として約9万点の民具を所蔵している。この資料は民俗学者の宮本常一名誉教授が当時の学生や若者たちとともに、全国規模で収集したコレクションである。美大生たちは、生活文化に制作のヒントを求める際に民俗資料室の収蔵庫を自由に閲覧できる。

その一つに万祝着と呼ばれる、房総半島から東北にかけての太平洋側の地域で、豊漁の祝いに用いられてきた晴れ着がある。海の豊かさとその恵みへの感謝や、漁業に携わる人々の互いの絆を示す図案が描かれ、めでたい吉祥と機知に富んだ「判じ」が染色で表現されている。本資料では、藍染めの紺地を空と海に見立て、家紋を背負った鶴が網元や船を表す幟のぼりをくわえて天から舞い降り、海には千鳥が飛び、「年々締めマス」（ますます繁栄する）というモチーフがあしらわれている。

鶴がくわえる幟に記された「祭魚洞」さいぎょどうは、宮本常一が師と仰ぐ渋沢敬三の雅号である。渋沢栄一を祖

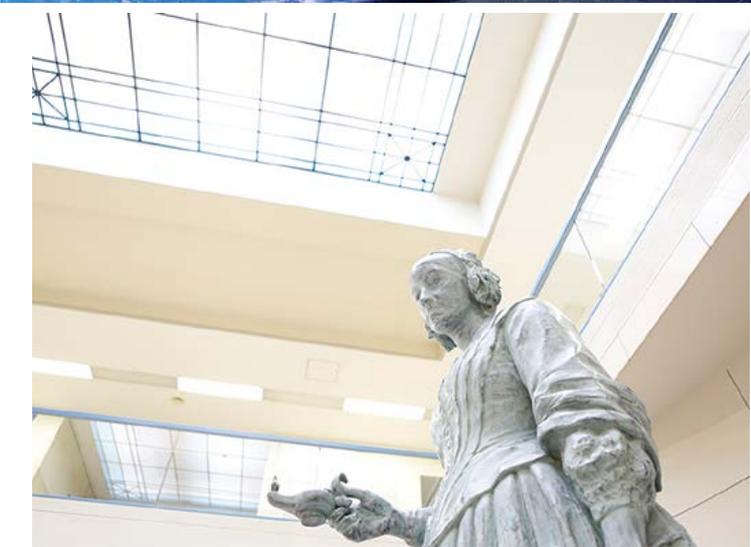
父に持つ渋沢敬三は、戦前に財界人として活躍したが、同時に日本の常民文化研究の発展に重要な役割を果たした。収集地が房総半島の地名でなく渋沢邸のあった「東京都港区」とあり、本資料は網主より渋沢敬三に贈られたものを宮本常一が譲り受け、晩年に教員として奉職した武蔵野美術大学の民具コレクションに加えたと考えられる。

現在、国立民族学博物館と武蔵野美術大学美術館・図書館が企画した特別展「民具のミカタ博覧会―見つけて、みつめて、知恵の素」展（2025年3月20日～6月3日）が、国立民族学博物館（大阪府吹田市）で開催中である。ふだんは学内で見られない資料が閲覧できる機会なので、ぜひ足を運んでいただきたい。



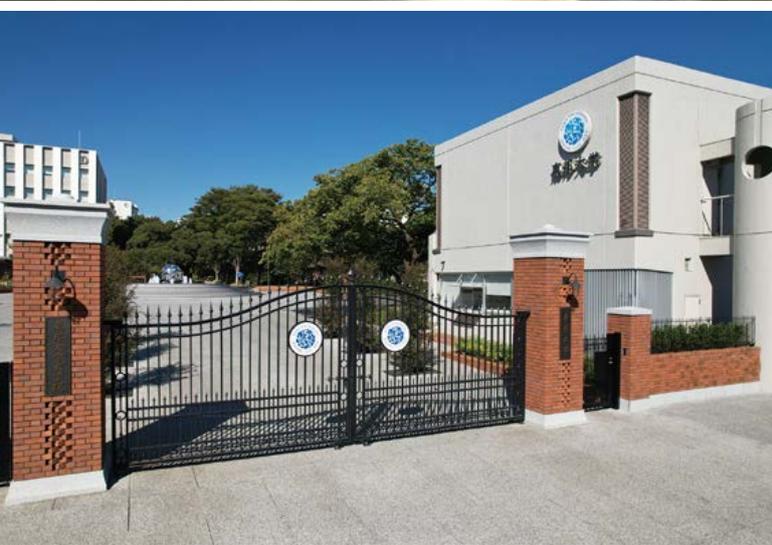
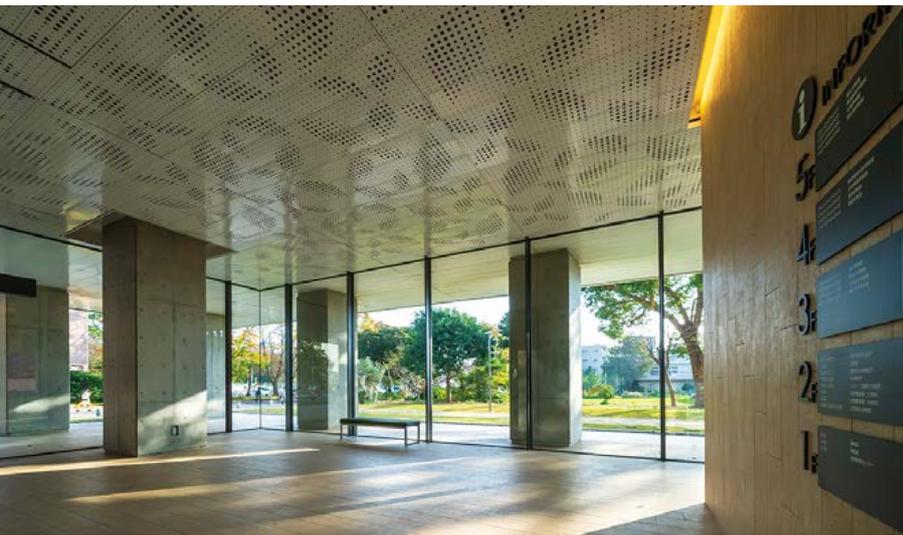
いのち
生命の科学で未来をつなぐ
東邦大学





100th
Anniversary

東邦大学は 2025 年に 100 周年を迎えました。



東邦大学



自然とは何だろう。
いのち
生命とは何だろう。

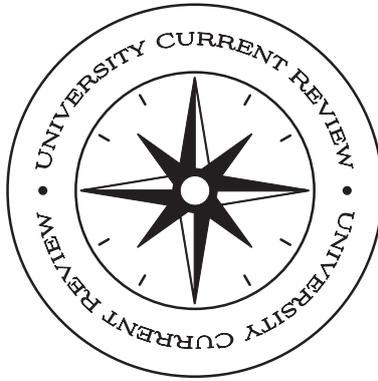


東邦大学

University Current Review

大学時報

2025.05/NO.422



時代を担える 人材育成を目指して

渡邊 善則 東邦大学学長

少子化により高等教育は量から質へ、教育体系は全体教育から個別・多様性ある教育へと転換が求められている。私立大学においては、各大学が建学の精神に基づき、充実した教育環境の下、豊かな教養と専門知識を備え、柔軟な思考力を持つ人材を育成し、社会の要請に応えることが使命である。特に医療系や自然科学系大学は、高い倫理観と豊かな人間性を持ち、自然や科学の力で社会に貢献する人材、未来をつなぐ人材を輩出することが責務と考える。

「学際」の甘い罠

稲積 宏誠 青山学院大学学長

1. プロローグ

「大学教員は放っておくとタコつば化してしまう」。これは、古くて新しい問題のように思う。大学の研究は、既存の専門分野の領域を守ろうとするのみで、社会から求められる課題解決につながらないことが多いと揶揄されることもある。場合によっては、大学および大学人の評価を下げてしまうことにもなりかねない。たとえ基礎研究であったとしても、それぞれの専門分野の意義や社会との接点を探る重要性を理解するなどして、そこを打開していかなければ大学および大学人の存在意義はないのではないだろうか。特に、私たちが取り巻く世界では、単一の専門分野の知見だけでは解決できない課題が山積しており、その際に、各領域を横断する取り組みをどのように進めるかが益々重要になっている。

2. 理系と文系

私が研究者の卵だったころ（残念ながら卵から孵化してもほとんど成長できなかったと思う）の、専門分野ごとの背景や考え方の違いを実感した2つのエピソードを思い出す。

1つは、助手として情報分野のセンターで紀要の編集をしていたころのことだ。商学分野の教授と話した際に「研究論文の論文誌への掲載」が話題に上った。私は「論文掲載料」を支払って掲載するのが通常の方法だと思っていたところ、この先生曰く「論文は執筆料をもらって書くものだ」とのこと。また後日、分野によっては評価の高い論文誌に掲載されたことが研究業績になるだけでなく、単行本として出版するほうが、より評価される場合があるということも知った。特に、単著としての出版

物が高く評価されるとも。

もう一つは、専任講師として情報系学科に所属していたころのことである。卒業研究発表会で、ある物理学分野の先生が、学生の発表中に質問をされた。私は「発表時間は発表者に使う権利がある。質問は発表終了後に行う」というルールだと理解していたが、この先生は別の見解をお持ちだった。「説明している途中で分からない点があったとき、すぐにそれを確認しなければ、以降の話も聞いても無駄。発表中に不明点を確認するのは当然」とのこと。たしかに理になっっているが、このような考え方で、研究発表時の運用方法を具体的に決めるのは非常に難しい。そこで、工学系の研究者はなるべく実現可能なルールを決めていったのだろうと想像できる。一方、理学系の研究者は工学系に比べると運用における効率性にはあまり関心を示さないことが多いように思える。

学際的な取り組みには、各専門領域に関する知見のほかに、そこで長年培われてきた文化への理解も求められることになる。同じ研究分野の中にしかないければ、普段のコミュニケーションが自分たちの専門領域の中で培われた文化に基づき成立していることに、何の違和感も

持たないだろう。

近年、発達めざましいAIも「常識」を学ぶことは最も苦手であるとされている。それぞれの専門分野特有の常識が形成されていると気づかずコミュニケーションが図られていること、またそれが異分野との融合を阻害する要因になってしまうことに注意しなければならない。

異分野間の理解がどれほど進んでいないかは、「理系」「文系」という画一的なレッテルからも感じられる。前述のとおり、「理」と「工」では基本的な発想や価値観が大きく異なる。理学は自然界の現象を記述し、説明する体系を学ぶ／作ること、工学はなんらかの目的関数を最大化／最小化することを重んじるというように、何を指向するかという点で大きく異なる。「文」を人文科学と社会科学に分けるととき、その発想に注目すると、前者は「理」に、後者は「工」に近い側面があるように感じてきた。「理系」との区分で同一に見られがちだが、「文系」、中でも「人文系」と「社会系」は、大きく性質を異にする。しかし、「理系」「文系」を一括りに見ている人は、その違いに気づきにくいようだ。

このような中で、学際的な取り組みはどのようなにして

生まれるのかを考察する。

3. 学際を通じて新たな分野が生まれる

ここでは学際分野の成り立ちや特徴を3つに分類し、それぞれが学際分野として体系づけられるための要件を考えてみよう。

・タイプ1「必然がつなぐ」

高度な数学の知識を活用して金融に関わるテーマ、たとえば、資産運用や取引、リスクヘッジ、リスクマネジメント、投資などに関する意思決定問題を扱う分野として成立しているのが「金融工学」と「数理ファイナンス」である。どちらも「金融」という対象を紐解くにあたり「数学」という道具をどのように用いるかで成立する学際領域である。ただし、金融工学が具体的な問題解決に資する理論および実践を指向するのに対し、「数理ファイナンス」は理論的な展開に主眼を置いている。

なお、この2つの領域では、手法を適用するにあたって具体的な成果を指標とする工学的発想と、手法そのものの理論としての完成度を指標とする理学的発想が両立している点で非常に興味深い例のように思える。

ルイ・バシュリエという先駆的な数学研究者がこの未知の分野を開拓したとされているが、まさに当該分野の必然性の中で生まれた学際分野であろう。

・タイプ2「概念の共有がつなぐ」

次に例としてあげるのは、「経営工学」だ。これは、技術者で経営学者でもあるフレデリック・テイラーが、企業や工場における生産性向上のために、作業方法とその管理技術の客観視化、合理化を図ろうとし提唱した「科学的管理法」に端を発した学問分野である。ここから、管理技術に関わる広範囲な領域を対象とした経営工学が成立していった。

管理技術は一意に決まるものではなく、対象領域ごとに個別に議論される概念に近いものと言える。対象領域は、人（人間工学、行動科学など）、部品・製造（生産工学、生産管理、品質管理など）、装置（信頼性工学、制御工学など）、情報（情報科学、システム工学、統計学、オペレーションズ・リサーチなど）、エネルギー（電気工学、電子工学など）、組織（経営学、社会学、ロジスティクスなど）と多岐にわたる。その結果、対象領域を扱う既存の専門分野の中に、主として管理技術に着目した個別

のテーマを体系化し、新たな専門分野として成立させていったとみなすことができる。

管理技術はさまざまな手法の組み合わせとなるため、応用数学として独自に展開していく側面も持つ。また、対象領域と手法との組み合わせの多様さが、学際領域を一つの専門分野として体系化するのを難しくしているとも言える。

・タイプ3「概念と機能の共有がつなぐ」

プログラム内蔵方式によるコンピュータの出現は、当該分野へ多くの専門領域からの新規参入を促した。数学、物理学、電気・電子工学、機械工学など理系の学問領域だけでなく、論理学や心理学などの人文系の学問領域も含めた多くの分野に属する研究者がコンピュータに係る研究を進めてきた。そこから「コンピュータによる情報処理に関連する科学技術の一分野」として、情報工学・情報科学・計算機科学などと呼ばれる学問分野が誕生した。面白いことに、日本では「情報」をキーワードに学部・学科名が構成されているのに対し、欧米ではやはり「コンピュータ」をキーワードにしているという特徴がある。あくまでも日本の大学は、「情報」を情報の発生・伝

達・収集・蓄積・処理などさまざまなフェーズを含めた総合的な分野としてとらえようとしているのだろう。

1956年のダートマス会議を起点とする人工知能分野の出現やネットワーク技術の進展からも窺えるように、コンピュータは人や社会を具現化する手段として、あらゆる分野との親和性を持つこととなった。学際的な成果物である「コンピュータ」を起点とし、多岐にわたる学問分野が生まれた。その学問分野が、あらためて「コンピュータ」を利用した新しい学際領域を生み出していると言える。

4. 学際をどのように位置づけるか

1991年に行われた大学設置基準の大綱化以降、まさに学際系学部が乱立した。学部設置にはさまざまな背景があり、何らかの専門性を有することだけに意味を持たせているわけではない。学生や研究者が異分野の知見にふれ、自分の専門分野を見つめ直すきっかけとなることや、各専門分野での教育・研究を発展させるためにも、このように学際系学部で視野を広げる意味は大きいからである。学びの意識や姿勢の観点からも、学際性は教育・

研究において必要な要素だと言える。「学際」を取り入れることは、まさに「タコつぼ化」を防ぐ手段として、有効であろう。

一方、学際的な取り組みを新たな専門領域として確立させることは、そうたやすくはない。

タイプ1「必然がつなぐ」は、個々の研究者が行う応用研究の一部に該当するもので、他分野の研究者との共同研究の多くがこれに当てはまるであろう。対象領域とその領域の問題を解決する手法を組み合わせるのは、文理横断的な取り組みの中でも典型的なスタイルだと言える。学部学科を超えてこれが実現できる素地をつくることができれば、大学の活性化にもつながるかもしれない。このような取り組みが体系化されていくことで、新たな研究領域の確立も期待できよう。

タイプ2「概念の共有がつなぐ」やタイプ3「概念と機能の共有がつなぐ」は研究者個人で行うというよりも、研究グループが時間をかけて成長させていくものである。どの分野にも既存の概念や機能への問題意識を持った研究者が一定数いて、各分野でこうした研究者が集う研究グループが生まれ、互いに連携し合うことで新たな

研究領域が確立される。そこから、学部や学科という組織を生み出すことも可能だろう。ただし、この場合には、学際領域としての新たな専門領域に、核となる要素があるかどうかで、特徴が異なる。

たとえば先にあげた例でいえば、情報工学では、適用対象の多様性にかかわらず、やはりコンピュータという強力な核が、当該分野を新たな専門分野として認知させるものになる。一方、経営工学は、適用対象だけでなく管理技術の多様性がゆえに、情報工学におけるコンピュータに相当する強力な核を持つことが難しいと言える。

1つの専門分野として成立し発展していけるのか、学際的な取り組みとして常に流動的に存在するのかという観点からの学際分野の特徴には、2通りのパターンがあるようだ。前者はさらに異分野との学際を、後者は当該分野そのものの流動性の中で派生的な分野を生み出すという性質が見られる。

5. 大学の活性化と学際の甘い罠

現状の大学の課題を学際性と絡めて考えるときには、「研究の活性化」に加えて「教育の充実化」も視野に入れ

る必要がある。中でも最大の課題は、理系教育へのアプローチであろう。「初等・中等教育の改善」という本質的な問題解決とは別に、大学における教養教育・共通教育としての取り組みも求められる。ここはまさに学際的なアプローチとして「経済学では数学がどのように用いられているのか」「心理学の学びと統計学の関係性」といった、対象領域と手法の関係に着目した教育プログラムが有効であろう。

また、環境問題を経済学や地理学といった複数数学問の見地、あるいは生物多様性などの観点からとらえるなど、多分野からのアプローチを重要視する教育プログラムも考えられる。

このように、初年度教育における学生の学びを誘発する取り組みに加え、戦略的に学際分野にチャレンジする場合に有効とされるのが「学位プログラム」の活用だ。これは学部等の組織の枠を超えた取り組みである。個々の専門分野、あるいは学際分野を学ぶ学生が、受講する科目の担当教員の所属や、科目と学位プログラムとの関係性を意識し、流動的に学んでいく。教員も「学際」と「専門」、それぞれに軸足を置く者が共存するという構図

だ。国立大学を中心に行われている教員の所属と学位プログラムとの独立性の積極的な解釈とも言える。

学際をテーマに、自身の取り組みの中での経験や限られた専門分野の視点から、その意義について考えてみた。なるべく一般化できるように工夫はしてみたが不十分だったかもしれない。ただ、大学の将来を考えると、教員の、そして大学の「タコつぼ化」は避けなければならぬ。学際の甘い罠にはまることも今後の大学改革に向けた一手ではないだろうか。